

■ 論文

特別支援教育及び保育幼児教育関連科目で 「乳幼児の発達」をどう取り扱うか —田中昌人・杉恵「子どもの発達と診断」等の教材化の試み—

渡部 昭 男*
高木 玉 江*

【要約】

田中昌人・田中杉恵監修「子どもの発達と診断」大月書店は、乳児篇2巻1983・幼児篇3巻1991からなるスライド資料（写真有田知行、録音テープ・シナリオ付）である。渡部は約40年の教鞭生活にわたって、特別支援教育科目（鳥取大学1982-2010・大阪成蹊大学2020-23）及び人間発達環境学科目（神戸大学2011-19）で授業教材として使い込んできた。コロナ禍2020で対面授業ができない時期には、スライドをデジタル化してオンライン講義に活用したり、録画してオンデマンドで視聴できるように工夫した。デジタル版教材は対面授業再開後の講義にも使い易く、教師や保育士を志す学生が子ども（障害児を含む）の成長する力と発達のすじ道を知り、現場に出てから発達保障実践を展開する素養を身に着ける上で極めて有用である。本報告では、「子どもの発達と診断」等の教材化の試みと授業実践を紹介した上で、特別支援教育科目（渡部）及び保育幼児教育科目（高木）で「乳幼児の発達」をどう取り扱うのかについて共に探った。

キーワード 田中昌人・田中杉恵「子どもの発達と診断」、スライド教材のデジタル教材化、子どもの成長する力・発達のすじ道、発達保障実践創造の素養、特別支援教育・保育幼児教育関連科目

I. はじめに

1. 田中昌人・杉恵監修「子どもの発達と診断」

田中昌人・田中杉恵監修「子どもの発達と診断」大月書店は、乳児篇2巻1983・幼児篇3巻1991からなるスライド資料（写真有田知行、解説用の録音カセットテープ・シナリオ付）である¹⁾。

スライド資料はどのような経緯・背景で発行されたのであろうか。この時期、田中昌人（1932-2005）は、1970年京都大学着任後の研究成果を京都大学教育学部紀要に掲載を始めている。すなわち、1977：発達における「階層」の概念の導入について（23号、1-13）、1980：発達における可逆操作について（26号、1-14）、1984：発達における階層間の移行についてⅠ一回転可逆操作の階層から連結可逆操作の階層へⅡ一連結可逆操作の階層から次元可逆操作の階層へ（30号、119-148）、1985：発達における階層間の移行についてⅢ一次元可逆操作の階層から変換可逆操作の階層へ（31号、32-59）、1987：発達における対称性原理について（33号、1-23）

である。また、青木書店から単著1980『人間発達の科学』、1987『人間発達の理論』を世に問うている。これらの理論化作業と並行して、田中昌人・田中杉恵・（写真）有田知行の3名共同作業によるシリーズ企画『子どもの発達と診断』（大月書店）が取り組まれた。すなわち、冊子体としては、1：乳児期前半1981、2：乳児期後半1982、3：幼児期Ⅰ1984、4：幼児期Ⅱ1987、5：幼児期Ⅲ1988である。この後、田中杉恵（1930-2006）も自身がかかわってきた発達診断の活動をまとめあげて、単著1990『発達診断と大津方式』を青木書店から上梓している（滋賀大学教育学部1989助教授着任、1990教授）。

このようにみると、スライド資料の乳児篇は冊子体の乳児期前半・後半が出た翌年（1983.3.27）に、幼児篇は冊子体の幼児期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲが出た数年後（1991.3.25）に、読者の学習を補う新たな媒体として用意され、満を持して発行されたことが分かる。

* 大阪成蹊大学 教育学部

2. 本稿の課題

恩師にあたるご夫妻のこのスライド資料を、渡部は約40年の教鞭生活にわたって、特別支援教育科目（鳥取大学1982-2010・大阪成蹊大学2020-23）及び人間発達環境学科目（神戸大学2011-19）で授業教材として使い込んできた。

本稿では、「子どもの発達と診断」等の教材化の試みと授業実践を紹介した上で、特別支援教育科目及び保育幼児教育科目で「乳幼児の発達」をどう取り扱うのかについて共に探してみたい。

II. 特別支援教育科目における教材活用例

1. 鳥取大学時代における活用例

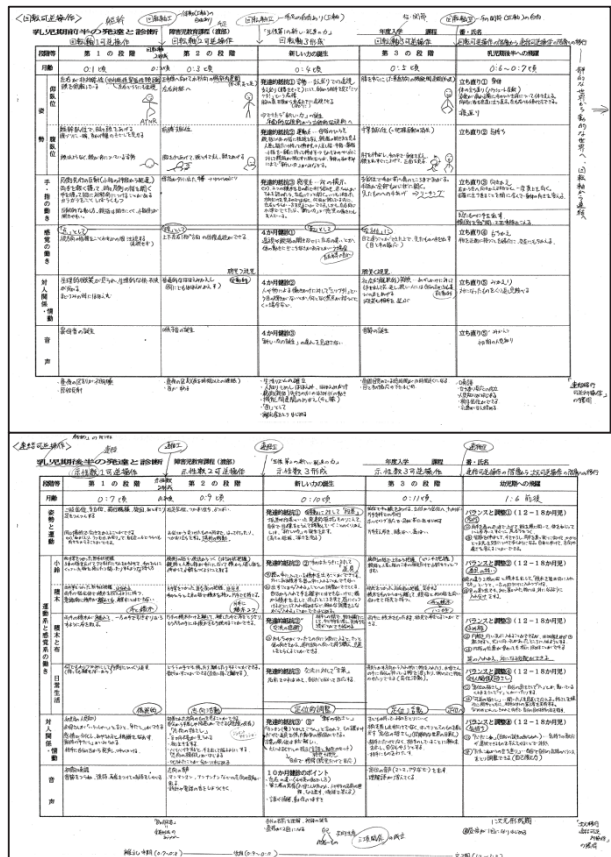
鳥取県は糸賀一雄の生まれ故郷でもあり、着任（1982）して間もなく附属養護学校（1978年開設）を訪ねると「この子らを世の光に」と書かれた額が校内に飾られていたことを想い出す。附属校に限らず鳥取県全体の障害児教育の現場に糸賀一雄を慕い、彼の提起した発達（権）保障の思想と実践をリスペクトする雰囲気があった。1950～60年代にかけて、田中昌人・田中杉恵とともに近江学園で糸賀のもとで働き、薫陶を受けた経験を持つ。

スライド「子どもの発達と診断」の乳児篇は、鳥取大学着任の約1年後に発行されている。教育学部養護学校教員養成課程のカリキュラムには障害児教育論・障害児教育課程・障害児指導法に加えて障害児診断法の演習（角本順次教授／ないし後任の寺川志奈子講師との共同担当）もあり、新版K式発達検査法の学びの一環に附属幼稚園や養護学校でも検査実習をさせていただいた。承諾を得にくい乳児期の被験者には、わが家の子ども達に登場して貰ったこともある。

2～3人で一組になって検査役・記録役（・進行役）を分担してチームで行うと検査はなんとか進み、記録用紙にも書き込みができて、最後には発達年齢が算出できる。しかし、仮に発達年齢が推定できたとしても、その子の発達の状況を読み取ったことにはならない。発達診断のためには、発達を診る力が要る。その教材として、まず乳児篇のスライド版を活用した（図書館に冊子体の『子どもの発達と診断』乳児期前半・乳児期後半も購入配架）。

授業準備はなかなか大変であった。スライド教材一式、スライド投影機、カセットテープレコーダー、電源延長コード、配布用印刷物（解説シナリオ、視聴録用紙）などを教室に持参し、スクリーンを下げて照明を落とし、解説の録音カセットテープを流しながら、トレーにセットしたスライドをコマ送り

作品1. 鳥取大学受講生の記録用紙（乳児期）



しなければならぬ。要所所でテープを止めて（必要な場合はコマ戻しをして）、受講生の理解が進むよう補足する必要もある。しかし、スライド資料に登場する子どもや家族は京都大学の院生仲間や先輩方であり、田中先生ご夫妻が監修したスライドや解説シナリオから学ぶことも多く、講じている際にも熱が入ったものである。その頃の乳児篇スライド学習の「記録用紙」は、作品1のようである（國本真吾鳥取短期大学教授提供：鳥取大学教育学部平成8年度入学、同大学院教育学研究科障害児教育専攻1期生）。簡単なイラストを添えながら欄外にまでびっしりとメモ書きしてあり、受講後20余年を経ても大切に保存されている。

1991年以降には、さらに幼児篇も加わった。幼児篇の記録用紙は、「子どもの発達と診断」のスライド教材の活用を保育幼児教育科目で取り組んでいた渡部容子元鳥取短期大学教授から譲っていただいた。

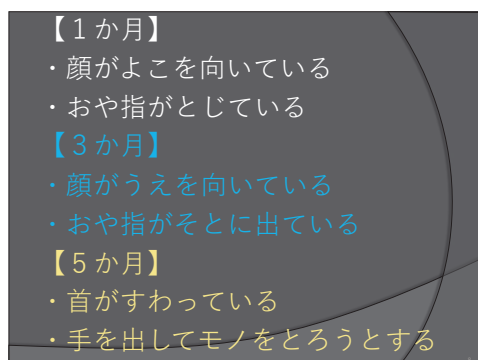
2. 神戸大学時代における活用例

神戸大学に赴任したのは2011年であった。特別支援教育科目の担当はなかったが、人間発達環境学関連科目でスライド資料を活用した。神戸大学時代には、レトロなスライド投影機はすでに時代遅れに

資料1. KUPI シラバス 2019 (渡部)

【授業科目名】 よりよく生きるための科学と文化	【曜日・時間】 後期・水曜日・5限
【テーマ】 第6回目 人間の発達「赤ちゃんの月齢をあてる眼力を身につけよう」	【先生】 渡部 昭男
【授業をする日】 11月6日(水) 17:00~18:30	【場所】 A347
【授業の内容】 街で子どもと出会うことがあります。歩いていけば一歳をこえているな…などと判断しますが、あなたは抱っこされている赤ちゃんの月齢がわかりますか？ 人間の発達には差別的性があると言われています。今回は、一歳になる前の赤ちゃん(乳児期)の発達を学びます。	
【授業の計画】 5分：導入 30分：乳児期前半(0~5か月)の赤ちゃん 30分：乳児期後半(6~12か月)の赤ちゃん 15分：演習(枕草子「うつくしきもの」の赤ちゃんの月齢を推理する) 10分：ふりかえり	
【みなさんへのメッセージ】 講義が終わって街に出ると、電車やバスに乗っている赤ちゃんが何か月なのか、見抜くことができるようになってはいます。お楽しみに!	

資料2. 乳児期前半の特徴例(1・3・5か月児)



なっており、他の方法を工夫する必要があった。そこで、スライドをデジタル化する機器を購入し、デジタル教材をパソコンで上映する手法に切り替えた。音声は従来通りカセットテープレコーダであったが、授業準備は格段に楽になった。

発達科学部生向けのオムニバス「発達科学への招待」の経験も活かして、学ぶ楽しみ発見プログラム KUPI (Kobe University Program for Inclusion、津田英二教授主宰 <http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>) において知的障害青年を相手に行った「人間の発達：赤ちゃんの月齢をあてる眼力を身につけよう」(2019.11.6)を紹介する(資料1)。

わずか1コマの講義ではあるが、バスや電車と赤ちゃんと出会った時に月齢を推定する眼力を身につけようというものである。静止画のスライド視聴だけでは飽きてしまわないかと、乳児期前半ではNHK 葵徳川三代の録画切り取り動画を、乳児期後半では清少納言の枕草紙「うつくしきもの」²⁾を用意して月齢当ての演習を組み込んだ。ここでは葵徳川

三代について紹介しよう。

歴史ものの大河ドラマには子や孫が誕生する場面がよく登場する。新生児に撮影依頼できることは稀であり、支障のない相応の月齢になった赤ちゃんが登場する。用意できた録画切り出し動画は徳川家康関係が2場面、徳川秀忠関係が2場面であったが、何か月くらいの赤ちゃんが登場するのかを当ててみようという趣向である。「子どもの発達と診断」(乳児期前半)の「あおむけ姿勢」と「手指のひらき」のスライド箇所を確認し、特徴をまとめた資料(資料2)を配布した上で、サポーターの神戸大学生と共に探るのであるが、これは大いに盛り上がった。

すでに頸のすわった5か月以降の赤ちゃんを祝福に来た家康や秀忠が抱き上げる場面が多い。しかし、秀忠に待望のお世継ぎ(後の三代将軍家光)が誕生したシーンは頸すわり前の月齢児が起用され、別途に赤ちゃんだけを撮影した画像に秀忠(西田敏行)やお江(岩下志麻)の様子を合成編集する形であり、ここぞという主要場面を意識した撮影サイドの力の入れようが分かる。

幼いころのアルバムを持参して、学習事項と照合し、学びを深め、楽しんでくれた受講生もいた。

3. 大阪成蹊大学時代における活用例

3.1 コロナ(COVID-19)禍における試行錯誤と工夫

大阪成蹊大学へ異動した2020年は、対面講義が制限されるコロナ禍のもとで、いかに授業を円滑かつ効果的に進めるか、試行錯誤と工夫の時であった。

教室でのスライド視聴がこれまでのようにはできない。コロナ感染拡大が落ち着くまでの大学教務サイドの推奨は、オンラインかオンデマンドによる講義の提供であった。ZOOMやGoogle for Educationなどについて俄か研修を受け、デジタル化済みのスライド教材(録音カセットテープについても中村隆一人間発達研究所所長がデジタル化を済ませてくれた)をオンライン講義に活用したり、録画してオンデマンドで視聴できるように工夫した。

デジタル版教材は対面授業再開後の講義にも使い易く、教師や保育士を志す学生が子ども(障害児を含む)の成長する力と発達のすじ道を知り、現場に出てから発達保障実践を展開する素養を身につける上で極めて有用である。

3.2 「障害発達支援論」の授業実践

このデジタル版教材は、後期科目「障害発達支援論」で活用している。この科目は、課程認定を受け

資料3. 障害発達支援論シラバス 2022 (渡部)

授業科目名： 障害発達支援論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名：渡部昭男 担当形態：単独
科目		特別支援教育領域に関する科目	
施行規則に定める 科目区分又は事項等	・心身に障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目（中心領域：知、含む領域：肢・病）		
授業のテーマ及び到達目標			
<p>・テーマ：学習指導要領における学びの多様性・連続性・個別性の扱いを踏まえた上で、発達段階及び発達課題に応じた教育指導と発達支援のあり方、「自分づくり」に応じた教育指導と発達支援のあり方、学校階梯・ライフステージ間における移行の課題と支援のあり方について理解し、教育現場及び地域での教育指導と発達支援に活かす。</p> <p>・到達目標</p> <p>① 学習指導要領における多様性及び学びの連続性の重視、個別の指導計画、個別の支援計画（個別の移行支援計画を含む）の策定と活用等について理解している。</p> <p>② 発達段階及び発達課題に応じた教育指導と発達支援のあり方について理解している。</p> <p>③ 各園学校・部における「自分づくり」に応じた教育指導と発達支援のあり方について理解している。</p> <p>④ 学校階梯・ライフステージ間における移行の課題と支援（移行支援計画の活用を含む）のあり方について理解している。</p>			
授業の概要			
学習指導要領における学びの多様性・連続性・個別性の扱いを学ぶ。その上で、発達段階及び発達課題に応じた教育指導と発達支援、「自分づくり」に応じた教育指導と発達支援、学校階梯・ライフステージ間における移行の課題と支援について知り、教育指導と発達支援のあり方を探る。			
授業計画			
第I部：各園学校・学部における「自分づくり」に応じた教育指導と発達支援			
1)10/05：鳥取大学附属特別支援学校における「自分づくり」の支援 ストレッチマンNHK番組			
2)10/12：専攻科1年目の実践			
3)10/19：専攻科2年目の実践			
4)10/26：専攻科3年目の実践：ヤドカリと私、住みたい家、四コマ漫画			
5)11/02：青年期とは：山田洋次監督「学校II」／二重の移行支援			
6)11/09：思春期（中学部）における「自分づくり」の授業実践			
7)11/16：学童期（小学部）における「自分づくり」の授業実践 青色：実施済み			
レポート①テキストのまとめ 30点 締切り2023年1/11水18時GoogleClassroom			
第II部：発達段階及び発達課題に応じた教育指導と発達支援			
8)11/23：新版K式発達検査法／田中昌人・杉恵／KUPI「発達（赤ちゃん）博士」になろう			
9)11/30：乳児期前半期の発達段階にいる障害児の教育と支援			
10)12/07：乳児期後半期の発達段階にいる障害児の教育と支援			
11)12/14：幼児期前期の発達段階にいる障害児の教育と支援			
12)12/21：幼児期中期の発達段階にいる障害児の教育と支援			
13)01/11：幼児期後期の発達段階にいる障害児の教育と支援			
14)01/18：「自分づくり」の授業実践：段階別教育内容表の活用			
レポート②鳥取大学附特公開研に参加して 20点 締切り01/25水18時GoogleClassroom			
子どもの発達と診断：記録用紙の提出（乳児期2枚＋幼児期3枚） 15点 締切り01/27金18時GC			
テキスト			
『障がい青年の自分づくり：二重の移行支援と青年期教育』（渡部昭男、日本標準 2009）			
参考書・参考資料等			
○文部科学省			
『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚園・小学部・中学部）』（文部科学省 2018）			
『特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）』（文部科学省 2018）			
『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚園・小学部・中学部）』（文部科学省 2018）			
○鳥取大学附属特別支援学校			
『段階別教育内容表（改訂版）』（鳥取大学附属特別支援学校 2011）			
『「自分づくり」を支援する学校：「生活を楽しむ子」をめざして』（渡部昭男・寺川志奈子編、明治図書 2005）			
『七転び八起きの自分づくり』（三木裕和監修、鳥取大学附属特別支援学校著、今井出版 2017）			
○田中昌人・杉恵			
『発達の扉（上・下）』（白石正久、かもがわ出版 1994／1996）			
『人間発達研究の創出と展開』（中村隆一・渡部昭男編、群青社 2016）			
○青年期の自分づくり			
『福祉事業型「専攻科」エコール KOBE の挑戦』（岡本正・河南勝・渡部昭男編著、クリエイツかもがわ 2013）			

評価：予習シート1点・小テスト4点×7回＝35点、レポート①30点、②20点、記録用紙15点の計100点

る際の当初案は「生涯発達支援論」という科目名であったが、特別支援学校教諭免許状科目であることが分かり易いようにと最終的には「障害発達支援論」となった。しかし、学校教育に留まらず生涯にわたる発達支援に資するような講義にしたいとの趣旨に変わりはない。

2022年度のシラバスを前頁に掲げた(資料3)。授業のテーマは、「学習指導要領における学びの多様性・連続性・個別性の扱いを踏まえた上で、発達段階及び発達課題に応じた教育指導と発達支援のあり方、『自分づくり』に応じた教育指導と発達支援のあり方、学校階梯・ライフステージ間における移行の課題と支援のあり方について理解し、教育現場及び地域での教育指導と発達支援に活かす」である。そして、到達目標には以下の4点を掲げた。

- ① 学習指導要領における多様性及び学びの連続性の重視、個別の指導計画、個別の支援計画(個別の移行支援計画を含む)の策定と活用等について理解している。
- ② 発達段階及び発達課題に応じた教育指導と発達支援のあり方について理解している。
- ③ 各園学校・部における「自分づくり」に応じた教育指導と発達支援のあり方について理解している。
- ④ 学校階梯・ライフステージ間における移行の課題と支援(移行支援計画の活用を含む)のあり方について理解している。

半期14回の講義(100分)の前半7回が第I部:各園学校・学部における「自分づくり」に応じた教育指導と発達支援、後半7回が第II部:発達段階及び発達課題に応じた教育指導と発達支援であり、後半で「子どもの発達と診断」を教材に学んでいる。

3.3 受講生の学びの経過と作品例

大阪成蹊大学では、1年次後期に教職科目必修の「特別支援教育概論」(2単位)がある。その後に、特別支援学校教諭免許状科目が始まるが、渡部関連でいえば、2年次前期に「特別支援教育原論」(2単位)がある。そこでは、特別支援教育に係る理念、歴史及び思想、社会的・制度的・経営的事項を扱うが、マカトン法やインリアル法といった簡単な指導技術も紹介している。とは言え、ようやく後期の本科目で具体的な教育課程及び指導法を学ぶことになるので、受講生の食いつきはとても良い。前半の7回ではこれまでに撮りためた授業動画を多く視聴して貰う。指導計画をたて、指導案を書くために、鳥取大学附属特別支援学校が使用している「自分づくりの段階表」(小学部~高等部本科、高等部

作品2. 特別支援教育原論受講生の記録用紙(乳児期)

作品3. 特別支援教育原論受講生の記録用紙(幼児期)

専攻科の2種)³⁾を印刷配布すると、「自分づくりの段階」を知るために発達のスジ道や原動力を学びたいという意欲に駆られる。後半のスライド「子どもの発達と診断」学習では、将来現場に出て活用できる宝物として5枚の記録用紙を完成させる。作品2・3⁴⁾は彩色したイラストでびっしりと描き込まれている。

Ⅲ. 保育幼児教育科目における教材活用例

1. 視聴覚教材の整備

「田中昌人」で大阪成蹊大学図書館の蔵書検索をすると、12件がヒットする。品切れのために「スライド子どもの発達と診断」は購入できていないが、冊子体『子どもの発達と診断』第1～5巻はシラバス掲載参考図書としてシラバスコーナーに配架されている。加えて、田中昌人・田中杉恵監修の「発達診断の実際」シリーズ（大月書店2008、DVD版、第1～8巻）及び同「あそびの中にみる〇歳児」シリーズ（大月書店2008、DVD版、1歳児～6歳児）が収められている。DVDは禁帯出であるが、申し出れば図書館内で視聴できるようになっている。

実は、同図書館には『発達診断の実際』及び『あそびの中にみる〇歳児』の一部がOPAC登録されていたが、相当前に短期大学のスタッフが購入したVHSビデオ版らしく、VHSビデオ機器のない図書館では視聴できないとのことであった。しかし、課程認定を受けて特別支援教育が立ち上がる2020年度前後に関連教材の整備がなされ、その中にDVD版が含まれていた（教材の選定等は村田観弥元大阪成蹊大学准教授）。そのDVD版を、2023年度に図書館へ移管して広く希望者の利用に供した次第である。これによって、特別支援教育、保育幼児教育等の学ぶ領域を越えて「子どもの発達と診断」を教材として活用する条件が整い、可能性が広がった。

2. 「保育内容総論」における活用例

高木は2023年4月に大阪成蹊大学に赴任し、「保育内容総論」を担当することになった。保育の内容を理解するためには、まずは子どもの発達を理解

し、子どもが発達していく過程について、学生個々が自らの中に取り込むことが大切だと考えた。まずは、シラバス作成に取り組んだ。

厚生労働省の第8回保育士養成課程等検討会（平成29年10月4日）において、参考資料「保育士養成課程の教科目及び教授内容等について」が示された。保育内容総論の目的（理解すべきこと）及び教授内容（標準的事項）は、資料4⁵⁾のようである。

「保育内容と子ども理解」のところに、「子どもの発達の特性と保育内容、個と集団の発達と保育内容」と書かれているが、内容が多岐にわたり、盛り沢山である。14回の授業で、学生がどれだけ子どもの発達が理解できるのであろうか、どのようにすれば保育内容を理解し、全体的に保育内容を俯瞰でき、見通しをもった保育の指導計画の作成ができるのであろうか、と思案をした。

また、幼稚園教諭養成課程の科目と保育士養成課程の教科目とを共通に開講する場合には、幼稚園教諭養成課程の科目を規定する「教職課程コアカリキュラム」と保育士養成課程の教科目を規定する「保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容」のベースとする考え方が異なることを踏まえた上で、それぞれの意味や事項について確認し、その両方を含むようにシラバスの内容を工夫する必要があった。

とりわけ、保育所保育指針に基づく保育の全体構造をとらえること、「保育目標」「育みたい資質能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「保育内容」の関連を理解させることである。そして幼稚園教育要領の総則でも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を理解し、それに沿って、5歳児後半の幼児の姿を具体的に説明できるようにしていくことが重要視されている。

そうであれば、乳児から幼児にかけての発達を理解していき、なおかつ、その年齢での発達の特徴を理解することが必須であり、保育内容を総合的にとらえていく土台になっていくものと考えた。

そこで、次頁の資料5のシラバスのとおり、「保育内容と保育の基本」、「保育内容の歴史の変遷」、「保育の多様な展開」を入れつつ、子どもの発達の

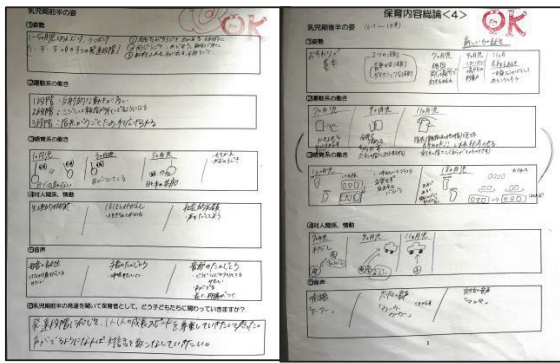
資料4. 保育内容総論の目的及び教授内容

教科目	授業形態	単位数	目標（理解すべきこと）	教授内容（標準的事項）
保育内容総論	演習	1	保育の基本と保育内容	保育所保育指針に基づく保育の基本及び保育内容の理解、保育の全体構造と保育内
			保育内容の歴史の変遷	保育内容の歴史の変遷
			保育内容と子ども理解	子どもの発達の特性と保育内容、個と集団の発達と保育内容、保育における観察、保育における記録
			保育の基本を踏まえた保育内容の展開	養護と教育が一体的に展開する保育、環境を通して行う保育、遊びによる総合的な保育、生活や発達の連続性に考慮した保育、家庭・地域・小学校との連携を踏まえた保育
			保育の多様な展開	乳児保育、長時間の保育、特別な支援を必要とする子どもの保育、多文化共生の保育

資料5. 保育内容総論シラバス 2023 (高木)

授業概要	<p>本授業は、幼稚園及び保育所における保育を構造的・総合的にとらえ、具体的な保育実践とのつながりにおいて保育内容を理解することをねらいとする。「保育の目標」「子どもの発達」「保育の内容」を関連づけて保育内容を理解し、保育の全体的な構造を理解する。</p> <p>幼稚園教育要領及び保育所保育指針それぞれの各章の関連性を読み取り、また保育内容の歴史の変遷の学習からも理解を深め保育内容を理解する。その上で、保育に必要な観察・記録の視点を習得し、発達に即した子ども理解と保育内容の展開について、実践と結びつけて学習する。事例研究や模擬保育などを適宜実施する。</p>	
授業回数	授業内容	授業内容での使用教材
第1回	本授業の目標・内容・評価等について／保育内容と保育の基本 本科目の性格や授業の目標、内容、評価、課題等について理解する。保育内容と保育の基本について既習内容を確認し、保育の全体を俯瞰的にとらえる。「保育内容総論」を学ぶ基本的な考え・幼少期の思いでをイメージマップ作成から考えよう。	
第2回	保育内容の歴史の変遷と社会的背景 近代以降の日本における保育内容及び保育方法の歴史の変遷について学ぶ。	
第3回	発達と保育内容(1) 子どもの発達の特性と保育内容 子どもの発達の特性を学び、保育内容とのつながりを理解する。「幼稚園教育要領」等における保育内容のとらえ方、子ども理解と評価の考え方	乳児期前半の姿：「子どもの発達と診断」スライド視聴
第4回	発達と保育内容(2) 個と集団の育ちを支える保育 子どもの発達を「個」と「集団」の視点からとらえ、クラス経営の基本を理解する。	乳児期後半の姿：「子どもの発達と診断」スライド視聴
第5回	保育における観察と記録：指導計画の作成の理解 保育における観察の視点と記録の方法を学び、子ども理解に基づく指導計画案の作成について理解する。	子どもの発達と診断：DVD「発達診断の実際」1歳前半と1歳後半の姿
第6回	保育の基本(1) 養護と教育が一体的に展開する保育 「保育」という言葉の意味を再考し、養護と教育が一体的に展開する保育について、具体的に学ぶ。授業の後半では、模擬保育に取り組む。	2歳の発達を中心に：「子どもの発達と診断」スライド視聴
第7回	保育の基本(2) 環境を通して行う保育 子どもの主体的な活動が展開されるための環境構成と情報機器の活用法について、具体的に学ぶ。授業の後半では、模擬保育に取り組む。	3歳・4歳前半・4歳後半の発達を中心に：「子どもの発達と診断」スライド視聴、DVD「発達診断の実際」
第8回	保育の基本(3) 遊びによる総合的な保育：遊びや生活を通して学ぶということ 子どもの遊びの重要性と5領域とのつながり、遊びの指導方法について、具体的に学ぶ。遊びと生活のとの関係について考える。授業の後半では、模擬保育に取り組む。	4歳・5歳の発達を中心に：「子どもの発達と診断」スライド視聴、DVD「発達診断の実際」
第9回	保育の基本(4) 子どもの主体性を尊重する保育 子どもの発達を広い視野かつ長い目でとらえることの重要性を理解し、主体的な活動としての遊びや子どもの主体性がはぐくまれる環境について学ぶ。授業の後半では、模擬保育に取り組む。模擬保育と指導案を作成する。	3歳から5歳の遊びを中心に：DVD「発達診断の実際」
第10回	保育の基本(5) 家庭や地域、小学校との連携を踏まえた保育園と家庭、地域、小学校との連携の必要性と方法について、具体的に理解する。授業の後半では、模擬保育に取り組む。模擬保育のための教材と指導案を作成する。	
第11回	保育の多様な展開(1) 乳児保育 乳児保育(3歳未満児保育)の需要が増大している現状を踏まえ、3歳未満児の特性と必要な配慮について具体的に学ぶ。授業の後半では、模擬保育に取り組む。	
第12回	保育の多様な展開(2) 長時間保育 ライフスタイルの変化を踏まえ、長時間保育をはじめとする保育の現代的な課題について学ぶ。授業の後半では、模擬保育に取り組む。	
第13回	保育の多様な展開(3) 特別な支援を必要とする子どもの保育 特別な支援や配慮を必要とする子どもの保育について、「インクルーシブ保育」の視点から学ぶ。授業の後半では、模擬保育に取り組む。	
第14回	保育の多様な展開(4) 多文化共生の保育 グローバル化が進む社会状況を踏まえ、多文化共生の視点から保育のあり方を考え	

作品4. 課題用紙 (乳児期前半・乳児期後半)



てもらふことで、全受講生の学習理解を促した。

幼児期については、「子どもの発達と診断」幼児篇のスライドをピックアップして表示し、主な年齢の特徴について説明を行った。なお、提示できなかった部分を含めて「子どもの発達と診断」幼児篇の全ては、オンデマンド教材のURLを提示し自宅での学修として活用してもらった。

各授業(各年齢)ごとに、発達の特徴が記録できる課題用紙を作成してもらっている。そして、これらの課題用紙を返却し、連続性をもった発達の特徴をとらえられるよう「発達表」(乳児版・幼児版)にまとめてもらった。特に幼児版の「発達表」には、個の発達だけでなく、他者との関わりから集団づくりの発展の段階をとらえられるよう「社会性の発達」を項目に入れてある。(作品4・5・6⁴⁾)

学生自身が、保育内容を理解し、遊びや生活を学んでいくためには、月齢・年齢ごとの発達の特徴と発達の連続性が分かって、子どもをリアルにイメージできることが大切である。そして、子どもを主体として活動が展開できるよう保育内容を捉え、主体的な遊びを子ども自身が展開できるようになることが求められる。そこで、第3回・第4回の授業では、乳児期の発達的变化を捉えやすいように、「子どもの発達と診断」の乳児期前半・後半の「2つの法則」(次々頁の資料8、資料9)を提示し、乳児期前半の「4か月ころ」の「新しい力の誕生」と「6、7か月ころ」の「後半への飛躍」、乳児期後半では「10か月ころ」の「新しい力の誕生」と「12~18か月ころ」の「幼児期への飛躍」を取り出して、保育の実際も踏まえて説明している。記録としては「姿勢」「運動」「感覚系の動き」「対人関係、情動」「音声」について、記述やイラストを用いて学生に自由に表現してもらった。最後にこの時期の子どもにどのように関わっていくのかコメントを求めている。

作品5. 発達表 (乳児版・幼児版)

	乳児前半	乳児後半	幼児前半	幼児後半
生理的機能・認知機能の発達
言語機能の発達
遊び・生活面への関わりと援助
絵本や玩具等

	1歳-【自覚の拡大】 【自覚の拡大】	2歳-【自覚心、自利心が育つ】 【自覚心、自利心が育つ】	4歳-【自覚心、自利心が育つ】 【自覚心、自利心が育つ】	6歳-【真ん中の発達】 【真ん中の発達】
生理的機能・認知機能の発達
社会性
関わりと援助
遊び・絵本等

作品6. 三方向画(自己多面視)・成長画(自己形成視)



特徴を学ぶ機会を毎時間入れ込むようにした(右欄は授業内容での使用教材)。

3. 受講生の学びの経緯と作品例

乳児期は、「子どもの発達と診断」のスライド視聴を中心に行った。その後、文字やイラストで記録してもらった。授業内でも視聴したが、自宅に帰り復習用としてもオンデマンド教材のURLを提示し、繰り返し視聴して発達理解が進むようにした。また、当日体調不良で欠席の学生には、後日にスライドを視聴してもらい、発達の特徴について記録し提出し

作品4は、イラストによって乳児期前半の「感覚系のはたらき」の「追視」をよく表現している。本人の了解のもと、次の授業内で他の学生にも紹介し、「物を追視」していくことから「目と手の協応」に繋がっていくのであり、主体的な探索活動、主体的な遊びにも発展していくことを伝えた。

作品6の「三方向画(自己多面視)」は、5歳後半になってくると、自己を客観視できるようになり、自己を多面的に認識するとともに、他者に対しても多面的に捉えることが出来るようになり、「ちがうけどおなじ」世界をとらえられるようになることを実感してもらおうよう描いてもらった。「正面向き」では身体の細部まで綿密に描くことができるようになること、「横向き」では目・耳などの対のもの

のは片方を描き、手足も工夫して描けるようになること、「成長画（自己形成視）」では自身の成長段階を見通す力もついてくることを、学生自身にも体感して取り込んでもらえるように行った。

Ⅳ. 「子どもの発達」をどう扱うか

1. 教職課程コアカリキュラムにおける扱い

2017 教職課程コアカリキュラム⁶⁾には、教科及び教科の指導法に関する科目として「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」、教育の基礎的理解に関する科目として「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」があり、「発達」について1～2か所の言及がある。すなわち、前者では、全体目標に「幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける」、一般目標に「幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける」が位置づけられている。後者では、一般目標に「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の障害の特性及び心身の発達を理解する」が据えられている。

なによりも発達への言及で注目すべきは、「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」の科目において、全体目標に「各発達段階における心理的特性を踏まえた学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解する」、一般目標に「心身の発達の過程及び特徴を理解する」が位置づけられ、到達目標に①「心身の発達に対する外的及び内的要因の相互作用、発達に関する代表的理論を踏まえ、発達の概念及び教育における発達理解の意義を理解している」、②「乳幼児期から青年期の各時期における運動発達・言語発達・認知発達・社会性の発達について、その具体的な内容を理解している」が掲げられていることである（下線は引用者、以下同じ）。

2. 特別支援学校コアカリキュラムにおける扱い

2022 特別支援学校教諭免許状コアカリキュラム⁷⁾では、視覚障害／聴覚障害／知的障害／肢体不自由の「障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を踏まえた」ないし病弱（身体虚弱を含む）の「病気や障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を踏まえた」という言い回しで発達に言及している。

3. 保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における扱い

保育幼児教育の養成科目においては、発達の扱い

資料6. 2017 保育所保育指針における発達の扱い

平成29（2017）年3月告示 保育所保育指針

※29改訂では、「子どもの発達」に関しての独立した章は消失。その代わりに、「第2章 保育の内容」において、乳児、1～3歳児、3歳児以上の3区分での保育のねらい・内容に先立ち、「(1) 基本的事項」の「ア」で、発達の特徴を保育との関わりで整理している。

1 乳児保育に関わるねらい及び内容
(1) 基本的事項
ア 乳児期の発達については、視覚、聴覚などの感覚や、座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達し、特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成されるといった特徴がある。これらの発達の特徴を踏まえて、乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要である。
(以下、略)

2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容
(1) 基本的事項
ア この時期においては、歩き始めから、歩く、走る、跳ぶなどへと、基本的な運動機能が次々に発達し、排泄の自立のための身体的機能も整うようになる。つまむ、めくるなどの指先の機能も発達し、食事、衣類の着脱なども、保育士等の援助の下で自分で行うようになる。発声も明確になり、語彙も増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。このように自分でできることが増えてくる時期であることから、保育士等は、子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わることが必要である。
(以下、略)


3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容
(1) 基本的事項
ア この時期においては、運動機能の発達により、基本的な動作が一通りできるようになるとともに、基本的な生活習慣もほぼ自立できるようになる。理解する語彙数が急激に増加し、知的興味や関心も高まっていく。仲間と遊び、仲間の中の一人という自覚が生じ、集団的な遊びや協同的な活動も見られるようになる。これらの発達の特徴を踏まえて、この時期の保育においては、個の成長と集団としての活動の充実が図られるようにしなければならない。
(以下、略)

資料7. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

- 健康な心と体…自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
- 自立心…自分の力でやり遂げる体験などを通じて自信をもつようになる。
- 協同性…友達と一緒に目的の実現に向けて考えたり協力したりするようになる。
- 道徳性・規範意識の芽生え…よいことや悪いことが分かり、相手の立場に立って行動するようになる。きまりを守ったりするようになる。
- 社会生活との関わり…家族を大切にしたり、身近な人と離れ合って地域に親しみをもつようになる。遊びや生活に必要な情報を役立てて活動したり、公共施設を利用して、社会とのつながりを意識するようになる。
- 思考力の芽生え…身近な事象から物の性質などを感じ取ったり、予想したりして、多様な関わりを楽しむようになる。
- 自然との関わり・生命尊重…自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。生命の不思議などに気付き、動植物を大切にできるようになる。
- 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚…遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しんだりして、興味や関心、感覚をもつようになる。
- 言葉による伝え合い…経験したことなどを言葉で伝えたり、話を聞いたりして、伝え合いを楽しむようになる。
- 豊かな感性と表現…心動かす出来事に触れ、感じたことを表現して、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

※これらは到達目標ではなく、一人一人の発達に即して育っていきます。
また、それぞれの姿の一部のみを記載していますので、詳しくは以下をご覧ください。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/index.htm



が変わってきている。これまでの保育所保育指針における発達関連の記述を比較してみると、1999 指針で「年齢ごとの発達」が章立てされていたものが、2008 指針では「発達が一括り」の記述となり、2017 指針では大幅に圧縮された（資料6）（國本真吾提供）。さらに「発達段階」ではなく「発達過程」として子どもを理解して受け止めていく流れにある⁸⁾。そのような中で、「発達段階」の用語はご法度で、教員によっては受講生が「発達段階」の語を使うと「発達過程」に訂正させることもあるという⁹⁾。

2017 幼稚園教育要領（2018 施行）等の特徴は、「学校教育のはじまりとしての幼稚園教育」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（略称、10の姿）（資料7¹⁰⁾）などが位置づけられたことである。小

資料8. 子どもの発達と診断：乳児篇の総括表

乳児期前半 2つの法則						
月齢	1か月ころ	2か月ころ	3か月ころ	4か月ころ	5か月ころ	6、7か月ころ
静かな法則	発達第1の段階		発達第2の段階		発達第3の段階	
ダイナミックな法則				誕生 新しい力の		飛躍 後半への

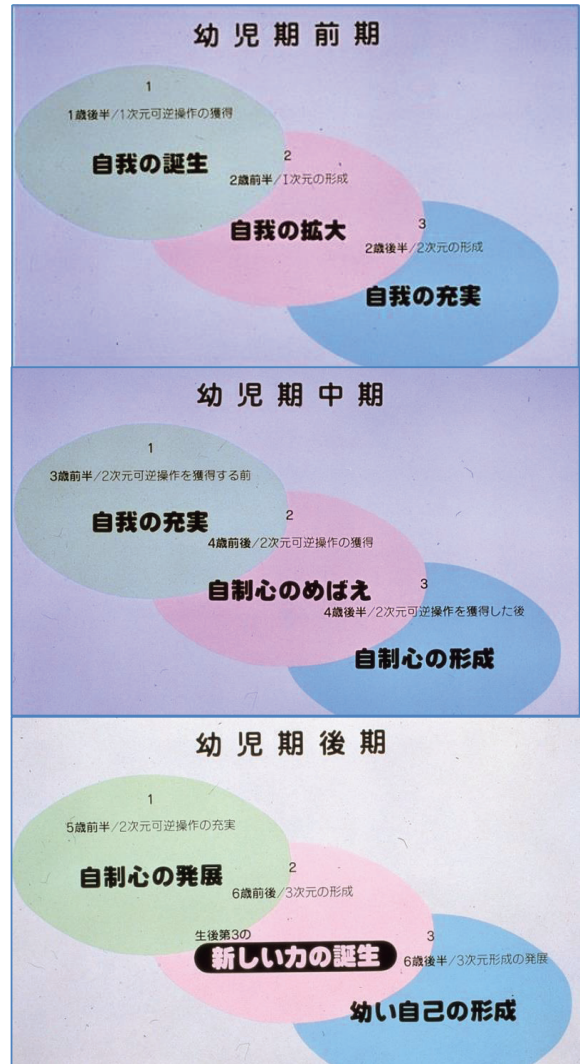
乳児期後半 2つの法則						
月齢	7か月ころ	8か月ころ	9か月ころ	10か月ころ	11か月ころ	12～18か月ころ
静かな法則	発達第1の段階		発達第2の段階		発達第3の段階	
ダイナミックな法則				誕生 新しい力の		飛躍 幼児期への

学校への接続が円滑にいくため、5領域を整理し直し、幼児期の生活の中に遊びを位置づけ、アクティブラーニングの3つの視点、「主体的・対話的な深い学び」の充実が示されている。

4. 「子どもの発達と診断」の教材活用の意義と可能性、そして醍醐味

「子どもの発達と診断」ではどのような「発達」の扱いになっているのであろうか。1983乳児篇の特徴は、「2つの法則」として「静かな法則」及び「ダイナミックな法則」がセットで説明されている点である（資料8¹¹⁾。「静かな法則」は発達の節目、発達段階であり、乳児期前半でいえば「1か月頃」「3か月頃」「5か月頃」の3つがそれに当たる。これに対して、「ダイナミックな法則」とは、『静かな法則』の奥深いところに成り立っている『新しい力の誕生』と『飛躍』である。そして、「新しい力の誕生」は「第二の段階から第三の段階へ進む間の4か月頃」、「乳児期後半への『飛躍』」は「6、7か月頃」に当たる（乳児期前半スライド9解説）。乳児期後半における「静かな法則」の3つの発達段階は「7か月頃」「9か月頃」「11か月頃」であり、「ダイナミックな法則」は「新しい力の誕生」が「10か月頃」、「幼児期への『飛躍』」は「1歳から1歳半ごろまでの半年をかけて」行われる（乳児期後半スライド8解説）。火山活動に例えて「静かな法則」は外から観察できる変化（噴火

資料9. 子どもの発達と診断：幼児篇の総括図



等)、「ダイナミックな法則」はその変化の元にあるマグマの地下活動と説明すると、受講生はイメージが掴めるようである。「静かな法則」（発達の節目・発達段階）もきちんと学んだ上で、「ダイナミックな法則」と結合させて子どもの発達の過程を動的に捉えようというのである。

ところで、1991幼児篇には「2つの法則」の総括表がない。そこで、この点については、田中昌人1983「生後第3の発達の階層における3つの発達段階と生後第3の新しい発達の力量の生成（着目点）」の表¹²⁾を配布して補っている。その表では、「静かな法則」の3つの発達段階は「1歳半ごろ」「4歳前後」「6、7歳ごろ」であり、「ダイナミックな法則」の「新しい力の誕生」が「5歳半ごろ」、「変換可逆操作の階層への飛躍的移行」が「8、9、10歳ごろ」にあたる。

幼児篇スライドでは、前期・中期・後期ごとに資料9¹¹⁾のような総括図が提示されている。これらを繋ぐと、「自我の誕生 / 1次元可逆操作の獲得（1

歳後半) —自我の拡大／(大文字の) I次元の形成(2歳前半) —自我の充実／2次元可逆操作を獲得する前(3歳前半) —自制心のめばえ／2次元可逆操作の獲得(4歳前後) —自制心の形成／2次元可逆操作を獲得した後(4歳後半) —自制心の発展／2次元可逆操作の充実(5歳前半) —生後第3の新しい力の誕生／3次元の形成(6歳前後) —幼い自己の形成／3次元形成の発展(6歳後半)」(下線種ごとに対応)のようになる。学童篇スライドが出ていたなら、「変換可逆操作の階層への飛躍的移行」という「飛躍」の説明もなされていたと思われるが、残念ながら途中切れで終わっている。とはいえ、幼児期の発達を自我・自制心・自己と絡めながら、子ども自身の成長する力を中軸に据えて観ていく視点・手法は、受講生にも分かり易く、共感的に学びとってもらえていると感じる。

このように「子どもの発達と診断」は発達段階と発達過程を分断させて対立的に理解するのではなく、両者を結合させて統一的に捉えることを促す教材としての意義と可能性を有している。そして、「子どもの発達と診断」を教材として活用した講義づくりの醍醐味は、現場に出てから発達保障実践を展開する素養を受講生が身に着けてくれていることに尽きよう。

備考

本稿は、I・II・III-1・IVを渡部が、III-2・3を高木が下書きし、討議しながら最終調整した。

謝辞

「子どもの発達と診断」等の教材化及び本稿の執筆にあたり、大月書店、渡部容子氏、中村隆一氏、國本真吾氏、川内紀世美氏、他の授業づくりMLのメンバー、作品掲載を了解下さった受講生、障害発達支援論及び保育内容総論の受講生の皆さんにお世話になりました。記して感謝を申し上げます。

注

- 1) 内容構成は、乳児篇スライド139枚・録音カセット2巻、幼児篇スライド222枚・録音カセット3巻である。なお、CiNi Books及びそれを反映した国立国会図書館サーチでは、同資料の書誌情報の発行年欄は「1980」または「198-」となっていた。そこで大月書店に確認したところ、「乳児篇1983.3.27、幼児篇1991.3.25」との回答であった(2023.9.7)。そのことをCiNiBooksに伝えて修正がなされ、いまは「1983-1991」という記載に改まっている。
- 2) 枕草紙を用いた授業づくりについては、渡部昭男2011「地域が学校をとりもどす」『地域学入門』ミネルヴァ書房に収録し

ている(pp.231-232)。

- 3) 渡部昭男・寺川志奈子監修2005『「自分づくり」を支援する学校』明治図書pp.28-29(小学部～高等部本科)、渡部昭男2009『障がい青年の自分づくり』日本標準pp.128-129(高等部専攻科)。
- 4) 作品制作者の受講生には匿名掲載を了解いただいた。
- 5) 厚生労働省HP「保育士養成課程の教科目及び教授内容等について」https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/sannkou1_2.pdf(2023.9.25 閲覧)。
- 6) 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会2017.11.17公表https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/houkoku/1398442.htm(2023.9.30 閲覧)。
- 7) 特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議2022.7.27公表https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/173/mext_00001.html(2023.9.30 閲覧)。
- 8) 渡部主宰の自主サークル「授業づくりML」のメンバーでもある國本真吾による指摘(2023.9.8MLメール)。國本は担当科目で配布している保育所保育指針の「発達」記述の変遷一覧をML配信してくれている。資料6はその一部である。
- 9) 同MLメンバーの川内紀世美大阪健康福祉短期大学(松江キャンパス)講師の指摘(2023.9.8MLメール)。
- 10) 無藤隆監修・大方美香編著2013『子どもの発達からみる「10の姿」の保育実践』ぎょうせい、文部科学省2019「一人一人のよさを未来へつなぐ：学校教育のはじまりとしての幼稚園教育」パンフレット(令和元年12月)https://www.mext.go.jp/content/1422303_07.pdf、など。転載した「10の姿」は、同パンフレットに掲載されたものである。類似した資料として他に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい『10の姿』～文部科学省 幼稚園教育要領～」<http://www.tsuruma.ed.jp/syukai/nyuusu/hogoyahe/youjiki-10.pdf>もある(いずれも2023.10.3 閲覧)。ともに到達目標ではないことを強調した、「※これらは到達目標ではなく、一人一人の発達に応じて育っていきます」、「※『10の姿』は到達すべき目標ではなく、子どもたちの主体的な学びを通じて、総合的に育まれるものです」という注意書きがある。
- 11) 資料7・資料8のスライド掲載については大月書店の許可(2023.9.11付)を得た。
- 12) 例えば、田中昌人1987『人間発達の理論』青木書店p.67、所収の「表1」。

How to deal with ‘infant development’ in special needs education subjects and childcare and early childhood education subjects: Practical experiences using Masato TANAKA and Sugie TANAKA’s “Child Development and Diagnosis” as a teaching material

WATANABE Akio*
TAKAGI Tamae*

Abstract :

“Child Development and Diagnosis (Otsuki Shoten)”, supervised by Masato TANAKA and Sugie TANAKA, is a set of slide materials consisting of 2 volumes for under 1 year old infants published in 1983 and 3 volumes for preschool infants published in 1991 (photos by Tomoyuki ARITA, audio tapes and scenarios included). Throughout about 40 years of teaching life, Akio WATANABE has used them as a teaching material in special needs education subjects (Tottori University 1982-2010, Osaka Seikei University 2020-23) and human development and environmental studies subjects (Kobe University 2011-19). When we were unable to hold face to face classes due to the covid-19 pandemic (2020-), slides were digitized and used for online lectures, or recorded so that they could be viewed on demand. This digital version teaching material is easy to use for lectures after face to face classes resume. It is extremely useful for students who wish to become teachers or childcare workers to learn about the growth potential of children (including children with disabilities) and their developmental path, as well as to acquire the foundation to create practices that guarantee the development of children when they get a job.

In this report, after introducing our attempts to convert “Child Development and Diagnosis” into teaching materials and class practices, we discussed how to deal with infant development in special needs education subjects (Akio WATANABE) and childcare and early childhood education subjects (Tamae TAKAGI).

Key words :

Masato TANAKA and Sugie TANAKA’s “Child Development and Diagnosis”, digitization of slide teaching materials, children’s growth potential and developmental path, basics for creating developmental security practices, special needs education subjects /childcare and early childhood education subjects

* Osaka Seikei University, Faculty of Education